

第 2 2 回大会に参加して

酪農学園大学 川上克巳

昭和 5 2 年度の家畜管理研究会現地研究会が 9 月 1 2 日、1 3 日の両日にわたり、日本の酪農郷を目指す根室の地で開かれた。

研究会の日程は、9 月 1 2 日 5 時より弟子屈温泉大鵬荘で総会、懇親会を行い、宿泊して 1 3 日は根室の新酪農村を見学する予定である。

1 2 日は昨日の大雨、台風接近のニュースも完全に外れ、例年の如く好天に恵まれ、良い研究会になることを暗示しているようであった。カレンダーを見ると 1 2 日が大安、1 3 日が友引となっており、すばらしい日を選んでくれた幹事諸氏に感謝する次第である。

私共札幌方面の参会者は釧路を経由するか、網走を経由するかにより汽車のコースが途中から全く違う訳であるが、いずれにしても早朝札幌を出発し、夕方弟子屈に到着することになり、時間的には大きな差がないようである。

私は札幌 7 時 5 分発の急行狩勝 2 号に乗った。列車は滝川を過ぎると空席が目立ち、ゆっくり足を伸ばし外の景色を眺めながら釧路まで来た。国鉄が赤字のせいシートがひどく、乗心地は最低であった。

釧路で釧網線に乗換え、弟子屈に到着したのは夕方の 4 時頃であった。この列車からは私の他にたくさんの方の会員諸氏が降り、駅前のバスにすぐ乗込んで大鵬荘に 4 時半頃到着した。大鵬荘ではすでに幹事諸氏が参会者の部屋割に忙がしく働いていた。

7 時から総会が始まり、広瀬会長から今回の新酪農村現地研究会の目的について次のようなお話しがあった。

新酪農村建設計画は第 3 期北海道総合開発計画に於ける農業部門の目玉として着工されたもので、入植後 3 年目を経過しようとしている時期に色々な問題点も生じてきている。

今回の見学会を通じ十分見聞し批判してほしいという内容であった。

広瀬会長の挨拶の後、小竹森、伊藤、松田各幹事の御苦労により総会は予定通り終了し、その後懇親会が持たれ会員相互の良き親睦の会となった。

翌日の 1 3 日は、早朝薄い雲におおわれていたが、出発の時間が近くなるとだんだん晴れて良き現地研究会になりそうであった。

昨日の懇親会のアルコールが多少残っている人もいたようであったが、皆さん張り切ってそれぞれの車に乗り込んだ。

貨切バス 1 台と数台の自家用車で大鵬荘を予定通り 8 時 3 0 分に出発した。

我々はバスガイドの声を耳にしなが、標高 8 5 3 m の摩周岳を左側に眺めながら、国道 2 4 3 号線を上春別へ向けて東へ進む。

弟子屈の街を出るまでバスガイドが弟子屈という町名の意味を説明してくれた。

ガイド嬢によると、弟子屈とは岩盤の多い所という意味だそうで、初めて意味を知ったのは私だけではないと思う。

又ガイド嬢から、根釧平野は約5万haで、道東のほぼ2分の1を占めているという話を聞き、広大さにすっかり驚かされた。

弟子屈の街を外れると空はすっかり雲が消え、すばらしい快晴となった。

我々の乗ったバスは広々とした波状の草原を、両側をカラマツ林に囲まれた国道を走る。

マイクはガイド嬢から道立根釧農業試験場の金川氏に移り、根釧酪農の概要とバスの通過する虹別、計根別の酪農の特色についての説明がある。

参会者の中には熱心にメモを取る人が多かった。

専技の説明によると、根釧酪農は粗飼料に大きく依存した草地型酪農であり、1戸当り面積は50ha以上である。又一部ではあるが集約型への試みも行われ、デントコーンの栽培もなされているということであるが、酪農経営に対する不安感が薄れ、結局は施設投資を増し、規模拡大へ向かうということである。

施設としては環境公害との関連で畜舎施設、主に糞尿施設に重点が置かれつつある。

又草地型の規模拡大とともに気密のステールサイロには今後ますます導入されるというお話しであった。

トラクタの導入については、3段階の発展経過で進み、今ままでは過去の30psクラスから50psクラスの移行であったが、現在は50psクラスから90psクラスへと大馬力化の傾向を示しているということである。

続いて専技は新酪の話に移る。

経営の概況についてみると、草地面積は酪農専業で1戸当り50ha、乳牛頭数は成牛で50頭、育成牛で18頭とのこと。畜舎はフリーストール及びスタンションの対頭式又は対尻式で、入植者の希望により撰択できるということ。牧場の価格は1億5千万円で自己負担金は3千万円である。フリーストールについては50頭規模ではメリットが少なく、せめて100頭位にしなくてはとのお話しである。又スタンション牛舎での50頭管理は心配されていたが、自動給飼システムの採用により十分対応できるとのことである。

その他の特色としては、サイロアンローダ、自動給飼システムの採用が婦人労働の節減に大きな貢献をしているとのこと。又婦人労働節減の面からロールベアラの人氣が高く、さかんに導入されつつある。

乳量については、従来フリーストールはスタンションに比べ個体管理が不十分で乳量の低下が起ると言われてきたが、新酪については今までのところそのようなことはないということである。

約30分の専技の説明に耳を傾けているうちに最初の見学地である上春別の井出農場に到着する。参会者は専技の説明で道東の酪農と新酪農村について概略知ることができた。

〔井出牧場にて〕

森普及員から井出牧場の経営概要について説明があると同時に、経営主の長男井出功一郎氏から具体的内容の説明があった。

井出牧場の概況は次のようである。

経営主の井出功氏は昭和21年に上春別の現在地に牛1頭、馬1頭、土地15haを父からもらって分家入植し畑作経営を始めた。昭和27年頃に畑作から酪農へ転換した。現在は採草地16.6ha、放牧地17.0ha、畑地(デントコーン)7ha、その他8.4haで合計49ha、乳牛は83頭(25ヶ月以上46頭、13~24ヶ月20頭、1~12ヶ月17頭)である。井出牧場はこの地方の中堅的酪農家で、長男の功一郎氏(33才)が後継者となり、父と共に地域の指導者として活躍している。

家族は経営主の井出功氏夫妻、長男夫婦とその子供3人で、家庭的にも円満というお話しであった。施設の状況は次のようである。

牛舎はキング式のブロック造り、206坪、サイロは4.5m×7.8m(コンクリート)1基、6.1m×8.2m(コンクリート、ブロック)2基、尿溜は4.5m×2.1mが2基、6.1m×2.1mが1基(コンクリート)、堆肥場は10坪(コンクリート)、農機具庫は20坪(木造)、牧草収納庫は50坪(D型ハウス)。

使用している農機具は次の如くである。

トラクタ76ps・46ps各1台・プラウ1・デスクハロー1・尿散布機1・ファームワゴン1・ブロードカスタ1・デスクモア1・レーキ1・タイトベアラ1・ハーベスタ $\frac{1}{3}$ ・ヘイバイン $\frac{1}{3}$ ・プランタ $\frac{1}{3}$ ・牛舎内機械としてはトップアンローダ・パイプミルカ・パンクリーナである。

畜舎内、外、および農機具庫を見学して驚いたことは、非常に良く整理整頓されていることである。我々といっしょに見学したガイド嬢も驚いていた。

工具類が整理、整頓され、農機具類も清掃されてきちんと保管されている。

作業前と思われるが、トラクタに装着されたデスクモアもナイフが研磨され、又トラクタ各部のグリスアップも十分なされているように拝見した。

畜舎内は清潔に保たれ畜舎特有の臭気もほとんど感じられなかった。

販売乳量は51年度で約300トン、1頭当たり平均搾乳量は6100kg(脂肪率3.5%)と非常に高い。この乳量の高い点について参会者より質問があり、長男の功一郎氏は次のように説明した。それによると、乳牛の飼養管理、健康管理に十分注意し、分娩については時期を問わないということである。

飼料はサイレージが主体で、糞尿の草地への施用は窒素過多を防ぐため止め、デントコーンの7haの土地に還元するとのこと。

サイレージは1番草50%とデントコーン全量、乾草は1番草50%と2番草全量、

所得については、収入が牛乳代、乳牛代、畜肉代の合計で2780万円、支出では経営費が1700万円で所得率38.5%である。

約25分間で井出牧場の見学を終え、9時50分に出発した。車はいよいよ新酪の地へ向けて走り出す。非常に良い天気である。涼しい風が、乳の香りのする風が車の中を心良く流れる。

車の窓からは波状の草原と樹木園が地平線まで続き、広大な眺めである。

専技のお話しによると、こんなに好天に恵まれることはめずらしいとのことである。

車の中ではこれからの見学地である新酪の問題点、概況について専技の話が続く。

それによると、スラリストアに関し、既存のデータにより設計したが、現実には小さかった。この原因に関し、専技を粗飼料中心の飼養管理の場合に乳牛の排泄量が多いのではないだろうかとの意見。

糞尿の施用についても、早春は土壌凍結のため困難、1番草の収穫後についてもすぐ2番草の収穫が始まるため、施用期間が短かく、トラクタ台数との関係で十分な施用ができない。又農道の整備が不十分なためトラクタの走行により草地をいためるとのことである。

専技の説明に熱心に耳を傾けているうちに車は別海町を通り新酪の地に入る。

右側の至る所に草地造成の風景が見えてくる。この地域が風蓮美原である。国道には時々牛横断の標識があり、札幌方面の我々には日常お目にかかることのできない標識である。

車は新酪入口と大きく書いた標識から右折し砂利道に入る。

車の窓からは広大な草原と樹木園の交叉する波状の野のはるかかなたに、スチールサイロの頭だけがあちこちに見える。参会者は窓からの広大な眺に心を奪われている。

そのうちに車は赤い平屋のモダンな牛舎と、高さが20mもある青いスチールサイロ、緑色のスラリストア、青いD型ハウス、片屋根の農具庫、近代的な住宅、すべてが新しい施設に包まれた牧場に到着する。ここが新酪の最初の見学地、武藤牧場である。

10時40分参会者は近代的な施設を早く見たいとばかり、足速やにバスを降りる。

〔新酪農村の牧場にて〕

農用地開発公社の進藤氏より開発の概要について説明がある。

開発の内容について北海道農業開発公社の松山氏が近代酪農（昭和49年9月号・P.30～33）で詳しく述べているので引用すると次のとおりである。

(1) 広大な未利用地、低利用地を有する風蓮美原地区に大規模で高効率な酪農、肉牛および複合の3タイプの経営農家を早急に創設するため、約10万2500haの草地を造成する。

所有の牧場施設（住宅を含む）を一体的に整備して建売牧場を建設し、大規模経営についての能力と意欲を有する農家を移住入植させる計画である。入植移住する農家は、根室地域で、酪農経営面積をこれ以上拡大したり、50ha以上にできない過密地帯、とくに床丹、恩根内、計根別、中標津地区から約150戸入植させるとともに、これら酪農家の経営を補うために公営的な性格の大規模な肉牛牧場を設けて一大酪農郷にする計画である。

(2) 移转入植した農家の跡地と、その地域にある未墾地等を開墾するなど、再整備して草地造成するとともに農地の集団化、畜舎などの改良、新設を行い大型機械を導入して経営の強化をはかる。

(3) 地域全体における畜産経営の能率向上と合理化をはかるため、ネットワーク事業として幹線道路の整備、農業用水の施設整備をはじめ、三相電気の施設などを全域にわたって実施する。

(4) 事業実施に当っては、風蓮美原、中標津、床丹恩根内、計根別工区入植に関連する以外の区域についても、開発目標を達成するため農地造成を行う。

(5) 地域全体が大規模畜産基地として有機的に機能するように、また地域全体の農家の営農活動に役立つように、牛乳および牛肉の合理的な生産、流通処理、加工に必要な機械センター、牛肉基地処理センターなどの諸施設を配備するとともに、生産流通の管理機能としての総合管理センターを建設する。

進藤氏の説明はこの内容を要約したものであり、入植の具体的内容についての説明は次のようであった。

50年度入植は8戸、牛舎型式はフリーストールとスタンションの対頭式、対尻式である。

フリーストールについては50年度、51年度各4、52年度は2で残りはスタンションである。フリーバーンは行っていないとのことである。牛舎型式の選択は入植者の意見を聞きながら決定する。飼料の給与はスチールサイロ(830㎡、500トン)からのヘイレージのみである。牧草収量は今までの実績によると10a当り4.5トン、乳量は1頭当り4400kg、経営収支については51年度で50年に入植した8戸の平均でみると、収入2100万円(乳販売1850万、個体販売250万)、支出1400万円で所得が700万円(所得率33%)ということである。

約10分で進藤氏のお話が終り、経営主の武藤氏にも参加者からいくつかの質問があった。

まずスチールサイロの利用について参加者の質問に次のように答えた。

武藤氏は新酪の地へ入植する前はパイロットファームで酪農を営んでおり、当時サイレージはバンカーサイロで高水分材料を調製したもので、冬期間の取出し、品質の低下、損失の増大に大きな問題があった。しかしこの地に入植し、スチールサイロを利用するようになってから、パイロットファーム時代のサイレージ調製の悩みは完全に解消されたということである。サイロへ詰める材料草の水分について、60~30%とかなりバラついたものを用いているが、損失も少なく非常に良質のサイレージができるということである。

スラリストアに関連した糞尿処理の質問については、車中での専技の説明にもあったように、糞尿の適期散布が行えないということである。その理由として春は土壌凍結のため、1番草の収穫後は2番草の収穫が継続して行われるため施用期間がないということ、結局は2番草の収穫後で、秋期散布になるとのこと。

スラリストアのスカムの問題については、半日ポンプで循環すれば心配はないということである。

牧草の収穫作業については、天候が不順であっても高能率の自走式ハーベスタ(4戸共同)を利用するので短期間で作業ができ心配はないということである。

我々参加者は武藤経営主の説明を聞き終ってから近代設備の畜舎を見学した。

11時15分車は次の見学先である石田牧場へ向けて出発した。約10分後に石田牧場に到着した。石田牧場の隣りが最後の見学先である斉藤牧場である。

見学した新酪のどの牧場も畜舎とそれに関連した施設はほとんど同じであるが、畜舎型式がそれぞれ異なる。武藤牧場がフリーストール対尻式、石田牧場がスタンション対頭式、斉藤牧場がスタンション対尻式である。

見学した3戸の畜舎施設及び農業機械については表1、表2に示す通りである。

主な施設については平屋の牛舎1、スチールサイロ1、スラリストア1、農機具庫1、D型ハウス1(2)である。

牛舎内には自動給飼装置、搾乳施設があり、スラリストアとそれに関連した糞尿処理施設、及びパドック施設がある。

農業機械については利用組合による共同利用で、トラクタが1戸に1台、高能率な自走式ハーベス

タが4戸に1台となっている。

どの牧場も一般に機械、施設の整理、整頓が非常に良く、また保守管理も非常によくなされていた。新酪の圃場はゆるやかに起伏した波状地が多く、又沢地もあり、排水状況もあまり良くないように感じられた。排根線も各所にあり1区の面積も小さい所が多いように見られた。

従って大型高能率の機械を十分活用できない面が多々あるように感じられた。

石田牧場で昼食をとり、12時20分吉田副会長の挨拶で52年度現地研究会を閉じ、散会した。

最後に近代設備を誇る新酪3戸の酪農家と最初に見学した上春別の既存酪農家について感想を述べると、既存の酪農家には独創的な酪農の道を切り開いてきた底力が感じられ、新酪の3戸については、多少の不安を抱きながらも近代施設の中に1つの夢を見出しつつあるように感じられた次第である。

いづれにしても酪農の営みの中に人間の力強い生命力を感じた次第である。

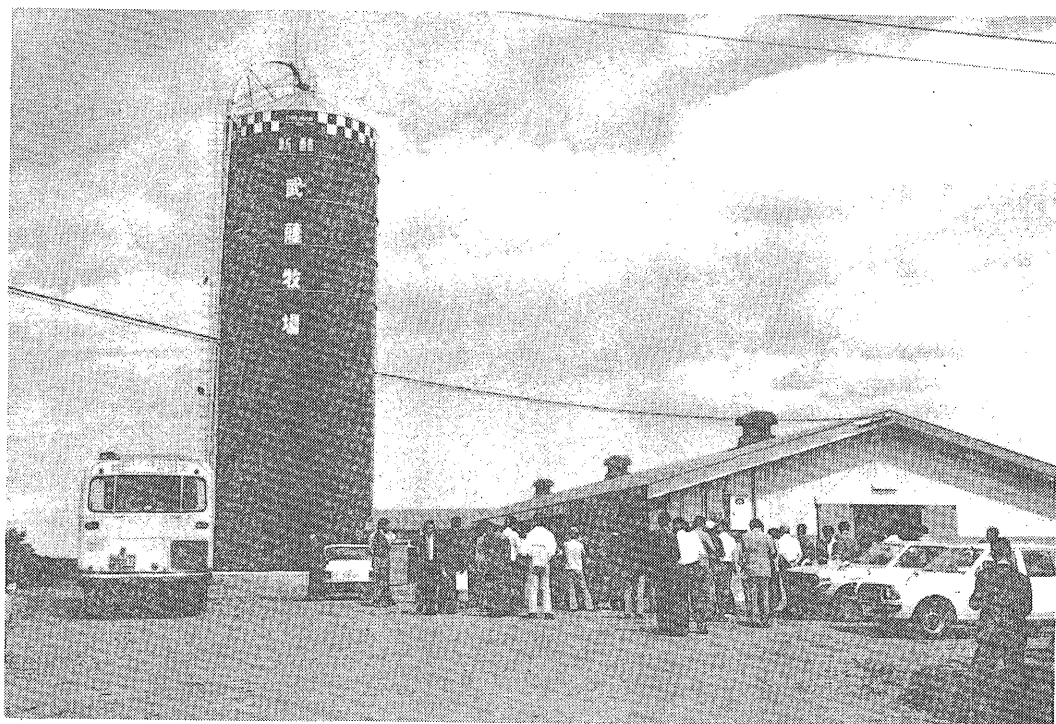


表 1. 経営施設の状況

施設		牧場名		
		武藤牧場	石田牧場	斉藤牧場
牛舎		フリーストール対尻式	スタンチヨン対頭式	スタンチヨン対尻式
		鉄骨平屋 735m ²	鉄骨平屋 619m ²	鉄骨平屋 679m ²
サイロ	本体	(英) コールマン社 842m ²	(英) ハワード社 844m ²	(英) ハワード社 844m ²
	アンローダ	(米) ローデス社 フレールアンローダ	(英) ハワード社 ゴライアス・スイープアーム式	(英) ハワード社 ゴライアス・スイープアーム式
自動給飼装置		(米) スターライン社 自動給飼機・85型L	(米) バツチャ社 BN61型	(米) バツチャ社 センタドライブ・フィーダ2台
搾乳施設		(米) サージ社 milking machine・ヘリングボーン4頭複列	(日) オリオン パイプラインミルクカー	(スウェーデン) アルファラバル社 パイプラインミルクカー
糞尿処理施設		(米) スターライン社 バーンスクレーパー (日) 緑産KK スラリサイロ (オーストラリア) バウワ社 スラリポンプ	(日) オリオン バーンクリーナ (英) ガスコイン社 スラリストア (西独) アイセル社 スラリポンプ	(日) オリオン バーンクリーナ (英) ガスコイン社 スラリストア (西独) アイセル社 スラリポンプ
農具庫		鉄骨平屋 107m ²	鉄骨平屋 107m ²	鉄骨平屋 107m ²
パドック施設		細粒アスファルト 505m ²	細粒アスファルト 504m ²	細粒アスファルト 506m ²

表 2. 農 機 具 所 有 状 況

種 類	武 藤 牧 場		石 田 牧 場		斉 藤 牧 場	
	型 式	台 数	型 式	台 数	型 式	台 数
ト ラ ク タ	フォード 5000	1	フィアット 750	1	フィアット 750	1
自走式モーアコンデショナ	N H 1469	$\frac{1}{4}$	ヘストン 6400	$\frac{1}{4}$	ヘストン 6400	$\frac{1}{4}$
自走式フォレジハーベスタ	N H 1880	$\frac{1}{4}$	ヘストン 4000	$\frac{1}{4}$	ヘストン 4000	$\frac{1}{4}$
フォーレジワゴン	N H 4	$\frac{3}{4}$	バジャー 14	$\frac{3}{4}$	バジャー 14	$\frac{3}{4}$
ブロードキャスタ	MB・C 410	$\frac{2}{4}$	MB・C 410	$\frac{2}{4}$	MB・C 410	$\frac{2}{4}$
テツダ・レーキ	リリー ジェミニテツダ	1	M G H 300A	1	M G H 300A	1
デスクモーア	N H 435	$\frac{2}{4}$	フィアット K・38	$\frac{2}{4}$	フィアット K・38	$\frac{2}{4}$
けん引式フォレジハーベスタ			N H S 717	$\frac{1}{4}$	N H S 717	$\frac{1}{4}$
スラリスプレッダ		$\frac{2}{4}$		$\frac{2}{4}$		$\frac{2}{4}$
パスチャハロー		$\frac{1}{4}$		$\frac{1}{4}$		$\frac{1}{4}$
ブ ロ ワ		$\frac{2}{4}$		$\frac{2}{4}$		$\frac{2}{4}$